

日本経済新聞

演奏会で故郷福井 元気に 指揮者・小松長生さん（語る ひと・まち・産業）

2017/11/8 12:00

- 音楽家の小松長生さん（59）は、福井県が2018年の福井国体向けに刷新した「新福井県民歌」の作曲を担当。2年に一度は福井県の小学5年生を集めたオーケストラを指揮するなど、世界中を飛び回る合間に故郷の福井でタクトを振る。



こまつ・ちようせい 1958年、福井県坂井市生まれ。東京大美学芸術学科、米イーストマン音楽院大学院指揮科卒。日本での指揮者デビューは1990年。2011年よりコスタリカ国立交響楽団桂冠指揮者、セントラル愛知交響楽団名誉指揮者。金城学院大教授。

「新県民歌は福井県庁の幹部で高校の同窓生から依頼された。最初はプロ仕様につくったが、老若男女が歌うということで音程を下げたことでずいぶん歌いやすくなった。オーケストラ版、吹奏楽版、カラオケ版もつくった」

「福井県の三国町（現・坂井市）の海辺で生まれ育った。越前海岸の荒波や強風のエネルギーと山々の美しさが強烈な幼時体験として残っている。ベートーベンをはじめ音楽家が自然から靈感を得て作曲しているように、楽譜を読む上で故郷での原体験は大いに助けとなっている。新福井県民歌では三好達治さんが福井の自然が凝縮した詞をつくられたが、（この体験のおかげで）曲でも表現できた」

- 地域活性化策として、コンサートを観光プランに盛り込むミュージックツーリズムを提唱する。

「コスタリカ国立交響楽団の桂冠指揮者を務めているが、コンサートでは半分以上の席が北米や欧州からの観光客で埋まる。コスタリカは恐竜映画のロケ地になるなど自然が豊かで、コン

サートの前後にバードウォッチングなどのエコツアーを楽しむ。これは日本でも可能だ。地方に音楽だけで誘客するのは難しいが、食文化や観光地と組み合わせれば音楽の価値が出る」



■ 指揮者として世界を飛び回る

「昨年の4月、坂井市にある宮大工が作った古民家の生家を知り合いの料理人に提供し地元食材を扱うレストラン『LULL (ラル)』がオープンした。「ジャズ演奏やウエディングパーティー会場として毎週にぎわっており、食と音楽が融合する場になっている。来店者も県外から4割、外国人も多い」

「食事は西洋音楽と縁が深い。音楽家が貴族に召し抱えられていたハイドンの時代には、演奏を聴きながら自慢の料理を振る舞っていた。しっかりとしたコンセプトをつくれれば、人はどこからでもやって来る」

■ 域外からの誘客だけでなく、地元住民に街を歩いてもらうきっかけとしても音楽の力が有効とみる。

「地元住民をターゲットにした消費喚起策として、教育コンサートを充実させてはどうだろうか。月に1回子供を連れて親や祖父母が街に出てくるようになり、結果としてコンサートの前後に食事や買い物をするようになる。そのためには、幼少時、小学生、中・高校生など、年代に合わせてプログラムや演出を細分化する必要がある。映画音楽など親しみやすいプログラムにすることもそうだが、視覚的要素を取り入れることも大事だ。私自身、パントマイムを使ったり、ぬいぐるみを登場させたりと色々試してきた」

「ジーンズのような格好で参加して楽しむコンサートもいいだろう。アメリカやカナダではそんな場でたくさん指揮してきた。ボストン交響楽団はかつて、ディナーを食べながら親しみやすい曲を演奏するボストンポップスというオーケストラを始めた。日本でもこれから広めていける」

■ 鯖江では「ホコ天」ジャズ

《一言メモ》 福井県には音楽を楽しむ文化が定着している。



クラシックでは、毎年約 7000 人を動員する越前市の「武生国際音楽祭」が 27 年の歴史を持つ。例年 9 月に約 1 週間にわたって開かれ、会期中は世界的な演奏家による音楽指導などが受けられるワークショップも開く。過去には小松長生さんも音楽監督を務めた。

吹奏楽の街をうたう鯖江市では、2015 年からジャズ演奏を街中で楽しむ「丹南ジャズストリート」が市内の商店街で始まった。商店街 150 メートルが歩行者天国となり、ステージで県内外出身のプロが演奏。飲食の屋台も立ち並ぶ音楽祭として年々規模が拡大している。

「コンサートはジーンズと T シャツで来てもいい」と話す小松さん。取材を受けた福井市文化会館での表情は輝いていた。

(吉田啓悟)